



# イーハトーブ

## 6月15日号

「少子高齢化」が言われてから、どれだけの年月が過ぎたのか。「少子化」については色々な切り口があるが、1990年に合計特殊出生率が1.57となり、戦後最低値を記録。これを機に、政府は少子化対策を講じるようになったとされている。岸田首相は少子化対策の基本スタンスを「結婚や子どもを産み、育てることに対する多様な価値観・考え方を尊重しつつ、若い世代が希望どおり結婚し、希望する誰もが子どもを産み、育てることができるようになること、すなわち、個人の幸福追求を支援することで、結果として少子化のトレンドを反転させること」とし「異次元の少子化対策」として①経済的支援（児童手当支給拡充）②保育サービス（保育所利用条件緩和等）③制度改革（育休取得率向上・賃金保障）の3項目を掲げた。しかし、これらは今までも論じられてきたことであり、改めて唱えるものではない。もう一方の課題である「高齢化」は医療費と年金の財政が大きな課題であり、少子化と高齢化の問題をセットにして、次代を担う者を社会全体で育てると言う取り組み意義は理解できるが、財源については明確にされていない。少子化では労働人口が減り企業活動が立ち行かなくなる事がクローズアップされているが、同時に消費人口も減ることを意味し、経済が回らなくなるとも言えるのではないか。子孫を残せない種は絶滅すると言う自然界の摂理からすれば、国力が衰退することに繋がるとも考えられる。

以上、今政府が講じようとしている少子高齢化対策が、企業活動、経済を成り立たせるためにと考えてならない。国民が冷やかに見ているのは、現実との乖離があまりに大きく、絵空事に見えるからではないか。岸田首相は少子化対策の基本スタンスの中に「個人の幸福追求を支援すること」とあるが、子供を産む前段で大きな障壁がある。経済格差による学習機会の格差がその一つで、好きな学問を探求するため大学院に進んだが、奨学金の総額が一千万円近くに膨れ上がっている事に気づき、返済のために中退して就職したという新聞記事を読んだ。日本学生支援機構のHPで試算すると約340万円の借入で、月額1万6千円で20年間の返済とり、22歳で就職して返済完了が42歳である。職場では「今も返済している」とか「結婚したらパートナーの奨学金を返済することになった」と言う話を聞いた。ちなみに留年すると支給が打ち切られ、借金だけが残るようである。高額の借金を背負って社会に出て、求められるのは「働き方改革」の名のもと、専門知識と即戦力。そして学び直しにより会社を渡り歩き、新たな可能性を見出し続けること、これが時代の趨勢とされている。まさに私たちが取り巻く状況そのものと感じる。この働き方で、どこに出産や子育ての暇があるのか。また少子化対策の中で介護が議論されていないのは片手落ちである。確かに人生は一生涯学びの連続であり、怠れば人としての成長は無い。しかし我々が求めているのは、人間らしく、希望をもって安心して暮らせる社会である。(Y・H)

### イーハトーブとは

「注文の多い料理店」や「雨ニモマケズ」などの著者として有名な宮沢賢治による造語です。故郷の岩手県をモチーフとし、彼の心の中にある理想郷を示す言葉です。

社会に目を向け、新しいものを積極的に取り入れ、農民の生活向上のために最後まで尽力した宮沢賢治の生き方に学びながら、私たちが外に目を向け、私たちが安心して働き暮らせる理想郷を実現していこうという思いを込め、イーハトーブというタイトルで情報発信を行っていきます。